

2011. 7. 15 / Vol. 34

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第 34 号

目 次

[連載]

- 神辺 靖光「学校をめぐる逸話と風景（8）
風俗匡正のための学校 …………… 2

[個人研究]

- 谷本 宗生「工部大学校から帝国大学工科大学へ」…………… 3

[大会]

- 小宮山道夫・富岡 勝「大会の概要（2011年6月5日）」…………… 5

[研究報告]

- 田中 智子「高等中学校制度と第三区内府県（3）
—広島・山口の場合—」… 8

[近況報告]

- 富岡 勝「近畿大学での大学アーカイヴズ立ち上げを目指して」…… 10

- [お知らせ]…………… 11

[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (8)

風俗匡正のための学校

神 辺 靖 光

品川県五番組の郷学校は太子堂の学校だけでなく、村々の寺院が假学校となって、授業が行われた。そして村々の寺子屋師匠が寺子を連れて、これに参加した。これらが、「学制」公布後、公立小学校になっているので、この郷学校は近代小学校の前哨、前身とされている。しかし五番組の郷学校仕方、規則等をみると第一義的に子どもの手習い学習を旨としたものではなかった。

明治3年11月の「郷学校所取立仕方」をみると“村々童蒙男女共有志之輩ハ入学致し、何れも手跡稽古”と子どもの学習らしいことも述べているが、“稽古は毎日朝六時半より四時迄（午前7時より10時）を朝稽古とし、昼八時より七時半迄（午後2時より5時）を夕稽古とし、“農業繁多之者ハ朝暮之内一度ツル出席可致”の一条もあるのである。4年4月の「郷学規則」には冒頭“第一倫理ヲ明ラカニシ礼儀ヲ守リ愈以テ無益ノ悪習ヲ除キ風俗ヲ正シクシ”以下、風俗匡正のことばかり掲げ、子どもの手習いのことなど全く書かれていない。“すべて肄業(いぎょう)(学習)中茶煙草相用候事堅ク不相候事”とあるのはこれが子ども相手ではなく、一般村民を対象にしたものであることを示している。実際に幼童の登校と並んで寺院を借りた假学校に村民有志の参加が常時あった。筆子の手習いとは別の学習をしたのだろう。

この時期、武蔵、相模両国には五番組のように数ヶ村同盟の郷学校が沢山できた。それらは子どもの

手習いもやっているが、主眼は村民の学習である。学習内容、学習者の年齢、学習日限、学習時間帯から、それを推察できる。村民の学習としては新しい産業として養豚を研究する布田郷学校(武蔵多摩郡)、西洋翻訳書を読む小野郷学校(同多摩郡)など顕著な例である。小野郷学校は「学制」による公立小学校になることを拒否して解散してしまった(拙論「明治初年・武相郷学校の学習形態」)。五番組郷学校は村民の風紀匡正を標榜した。その理由を考えたい。

江戸周辺の農村は17世紀中頃、中世的土豪支配から脱して一町10石高の本百姓が主体になった。しかし18世紀後半になると、これら中農の中から60石～100石以上という豪農が現れると同時に5石未満、1石未満という貧農が多く出るようになった。脱穀や賃搗業で賃金を得、在方商人を兼ねる富裕農民は質屋も兼ねてますます肥る。これに反し、貧農は土地を質入れし、それも取られて水呑百姓に墮ち、または労働者として江戸の町へ消える。こうして19世紀になると農村は豪農富農と貧農と対立関係を生むようになった。

一方、前回述べたように、18世紀には関東の地廻り産業が盛んになり、在地の豪農は貨幣経済に入る。その金を目当てに博奕が盛んになり、博徒が横行する。また博徒になり切れない浮浪人が村をふらつくようになる。農村はこれに備えて自警しなければならなくなった。さらにこれは全国的なことのようと思われるが村の若者組が増長して村役人の言う

ことをきかなくなった。祭礼を取り仕切るのが一般の風俗だが、これにこと寄せて法外な金を巻き上げたり、乱暴したりする。日頃の鬱憤を晴らすのであろう。

かてて加えて、この頃から江戸で打ち壊しが起り、周辺の農村にまで広がった。『東京百年史第1巻』博徒、無宿人の跳梁には関東取締出役＝八州廻りが新設されたが、幕末維新期の世情不安には村自身が自警する外はない。村の不安は外から這入る博徒、無宿人ばかりではない。村内に抱えている零細農民、水呑百姓も油断できないし、若者組の暴発も怖い。村内の秩序維持は抑えつけるだけでは駄目だ。そう思った村役人層は礼儀を守ろう、悪習を止めよう、

風俗をよくしようと叫んで郷学校をはじめたのである。

五番組郷学校では村民の学習に村役人層が立ち合っている。定期的に村役人が村民を顔を合わせているのは徒党を組ませない方途である。

こうした風俗匡正を掲げる郷学校は各地にみられる。学校は学問をする所、勉強をする所と観念されたのは明治5年以降のことである。幕末維新期の学校は政治所であったり、軍隊であったり、議会であったり、まことに多様である（拙論「藩治職制にみる学校の意義」）。学校が風俗匡正の場であっても少しもおかしくないのである。

[個人研究]

工部大学校から帝国大学工科大学へ

谷本 宗生

今回は、東京帝国大学工学部内の丁友会が1930年2月10日に発行している『丁友会パンフレット』第2号（非売品、東京大学図書館所蔵）の内容を少し紹介してみたいと思う。先走る読者のかたなどは、なにがどう面白いのか？と考えるのかもしれないが、まずは同上書の目次構成を示そう。

工科大学の沿革 1頁

明治廿年頃より三十年頃までの学校の内容 3頁

工科大学の学課の変遷に就いて 8頁

明治年間の学生の経済的方面に就いて 14頁

大学の角帽の由来に就いて

土木 和田義睦氏 23頁

明治十六年の学校騒動

土木 和田義睦談 28頁

ビルハウス博士講演概要 35頁

学生生活の面影 38頁

機械 広田理太郎氏談

土木 中山秀三郎氏談

造家 塚本靖氏談

土木 那波光雄氏談

採鉱、冶金 俵国一氏談

応化 伊東貞興氏談

土木 星野一太郎氏談

各科変遷の経路 66頁

明治年間の工業に就いて 68頁

書名だけを一見すると、昭和期の刊行物ゆえ 1880 年代の教育と関連あるのかどうかと思うかもしれない。ただ実際に目次を開いてみると、その疑問はすぐに解消されるであろう。同上書のなかでも、1886 年前後の工部大学校・帝国大学の学生生活について、土木出身（1888 年）の中山秀三郎の回想がとても興味深い。「私は明治十五年四月から二十一年七月迄工部大学校に在学して居た。もつとも在学中十九年三月一日に東京大学と合併して東京帝国大学〔ママ〕のうちの工科大学といふ事になつたが私の在学中は本郷の校舎が竣工せず虎の門の校舎で六年三ヶ月の学生生活をおくつた。…私共が工部大学校の四年生の時に今の帝国大学が創立され工科大学の二年生^(*)の編入された。…当時工部大学校の学生数は三十名位で、内三割位は土木であつた。以前は全部が官費生であつたが私の入学する数年前から一部の者は私費生といふ事になつた。…寄宿舎は中央にホールがあり左右に二階建の部屋が東西に二十宛あり一部屋に六人宛の定員であつた。…東京に家庭のある者でも全部寄宿舎に入らせられ、土曜日が外泊で一週間ぶりに家庭の人となる事ができた。寄宿舎の遊びは、当時もトランプ、碁等が大流行で賄の悪い時などは善くアミダをやつて食つたものだ。…一時は非常にやかましい取締を行つた事があつた。そういふ時には反抗したくなるもので、十一時にランプを取り上

げに廻つて来る役人に手洗水をぶつかけたりなんかした。賄征伐をやつて退学させられた者もあつた。寄宿舎の取締も明治十九年に工科大学になつてからは以前とまるで変つて自由になつた。工部大学校に入るには入学試験はあつたが、入学資格はなかつた。私は愛知中学の二年から、受験した。西洋人の部屋に一人宛入つて、書取の試験をやられたのを記憶して居る。志願者は三十人授用の所に四五十人位のものであつた。工部大学校時代にはアレキサンダーから応用力学、其他外人の先生が多かつたが工科大学になつてからは大部分が日本人の先生になつた。」

(42～44 頁)

工部大学校については、旧工部大学校史料編纂会『旧工部大学校史料・同附録』（1931 年初版、1978 年合本復刻）などが参考文献として挙げられるが、工部大学校や帝国大学工科大学を含めて言及記述されている史資料は稀少であろう。このような史資料を発掘していく作業はそう簡単ではないと思われる。大学図書館で所蔵されている図書や雑誌がほとんどすべて検索可能となっているからこそ、新たな検索探索・発掘能力が求められるのかもしれない。足で稼ぐ、ネットで情報検索する、関係文献を読みこなす、それぞれが相応に重要な作業でありながら、不思議と交錯しつつ新たな発見が生じてくるのではないか。

[大会]

大会の概要（2011年6月5日）

小宮山 道夫・富岡 勝

東京高円寺・神辺邸を会場に、神辺、荒井、富岡、谷本、田中、小宮山の6会員が参集し、科学研究費補助金『1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等中学校成立史を中心に—』（基盤研究B）に基づく今年度第1回研究会・例会を実施した。今回記録担当は小宮山会員と富岡会員、資料発送担当は谷本会員となった。

富岡事務局長の司会により、本例会では①2011年度研究計画の検討、②研究年報第3号執筆構想の確認、③教育史学会におけるコロキウム内容の検討を大きな柱として、参加者による活発な議論を繰り広げた。

まずは荒井代表による配布レジュメ「研究会の中長期的課題について」に基づき、科研費申請時点での研究課題と2010年度の研究成果を確認した上で、今後3年間の活動計画と最終報告書の作成について検討を行った。活動計画検討の一環として、6月24日に申込み締切となる教育史学会のコロキウム内容の検討という喫緊の課題から着手した。

前回例会において今年度京都大学を会場に開催される教育史学会大会にてコロキウムを主催することは決定しており、さらにオルガナイザーとして富岡会員が、司会者を荒井代表が務めることはスムーズに決定した。しかしテーマ設定をどのように行い、誰が報告者に立つかが課題であった。

京都が会場ということもあり、前回例会では研究蓄積もある第三高等学校を軸にテーマを構成する

案も出されていたが、2005年の東北大学大会で開催したコロキウムを振り返り、テーマを再考することとなった。

東北大会では、「1880年代日本教育史の再検討にむけて—高等中学校は何故、どのようにできたのか—」とのテーマで、1880年代や三高と四高研究を前面に出してテーマを限定し、司会者も報告者も会員でがっちり固め、共同研究発表のような周到な準備をしすぎたため、フロアからの活発な議論を呼び起こすことができなかった点が大きな反省点であったとの共通認識を得た。

このため今回は、より多くの教育史研究者の関心を引き起こす広いテーマとキーワードを設定する必要があることを確認した。そこで谷本会員の私案であり、富岡事務局長の提案原案ともなった本会の既刊の研究年報2冊および刊行予定の第3号の研究内容の合評会として位置づけることが承認された。

大枠としてはこれまでの本会の研究成果と課題を参加者に対して簡潔に報告するとともに、会員外に2名ほどの指定討論者を据えることで本会の活動を客観的に批評して貰い、参加者全体を巻き込んで議論の活性化を図ることを目指すことと決した。

具体的にはテーマを「近代日本におけるエリート教育の編成—明治期と大正期との対話—」とし、本研究会のこれまでの取り組みが大正期に関心を寄せる研究者から見ればどの様に位置づけられるのかを

問い、これまで以上に広い視野から近代日本のエリート教育の編成について検討することとした。

指定討論者としては協議の末、『公立大学の誕生 近代日本の大学と地域』（名古屋大学出版会、2010年）の著者である吉川卓治氏（名古屋大学）、『くお受験』の社会史—都市新中間層と私立小学校』（世織書房、2009年）の著者である小針誠氏（同志社女子大学）に是非ともお願いすることとし、交渉を荒井代表に一任することとした。また会員からの報告者としては、田中会員による推奨を参考意見としつつ諸般の事情を考慮した上で、小宮山会員が担当することとなった。

次に基盤研究の中長期計画とも関わる研究成果の公刊について検討した。荒井代表提案の2013年または2014年度に高等中学校研究で刊行助成申請を行う、という基本的方針について合意に至り、2012年度刊行予定の研究年報第4号では、ある程度出版を意識した内容とするよう取り組むことを確認した。

このため会員諸兄には基本的な資料収集を今年度中に目処をつけ、配分額が減少する来年度以降は執筆に専念できるよう今から心構えをしておかれたい（と述べている本人が一番心配です）。

そうこうするうちに昼食時となり、このたびも何故か醤油が付いてこない出前寿司を賞味しての昼食をはさんでしばし歓談した。

午後は小宮山報告の検討からはじまった。小宮山報告は研究年報第3号への投稿原稿「第五高等中学校の修学実態と社会的機能に関する研究（未定稿）」に基づく、第五高等中学校を入退学した生徒の学歴分析報告であった。

これまで明らかにされてこなかった入学生や編入生の出身尋常中学校の分析は、本会の他の研究とも密接に関わる基礎的な資料となり得るもので、重要な成果として歓迎された。その一方で、入学生の編入等級の決定が学校の裁量権の範囲内であったのかどうかといった基本的な疑問が未詳であったり、県立中学校や管理中学校などの違いが無試験入学と関連していたのかどうかにも目を向けておく必要があったりと、入学実態の全容解明にはまだまだ未解明な課題が横たわっていることも認識することとなった。

報告者にとっても、今後の執筆に当たっては表題を具体的かつ限定的なものに変更することや、入学実態と区域内委員会での議論との関連性についても明示することが望ましい等との助言が得られ、収穫の多い交流となった。

また、小宮山報告のように入退学の実態を把握することができるなど、現存する各地の旧制高校資料群の中でも、熊本大学五高記念館所蔵の五高文書がとりわけ重要な存在感を有していることを、参加者一同改めて認識した。鄭会員にも是非五高文書まで手を広げ、出張記録の検証を行って頂きたいとの要望もあがった。

荒井代表の早退後、神辺報告に移った。神辺報告は前回例会に引き続き研究年報第3号への投稿論文「中学校史の1880年代（その3）—教育内容と方法の形成3—」についての執筆構想であった。

今回は公立中学校の変則教則、邦語課程と英語課程、基準中学と准中学の教則、教則作成の工夫、の4点から、1870年代に全国に増加した公立中学校の

教育内容と方法を比較考察する構想とのことであつた。

全国各地の主要な中学校教則等を引用した資料に基づき、中学教則略以後、各府県で変則教則が作成され、小学校から連なる正規の中学校とは別に、進学系統とは異なる独自の中学校、二重構造の中学校を設立する時期を経験する府県が現れることになる。各中学校の変則教則、長崎の准中学校や福島の青年学校の存在がその例である。その後教則大綱によりそれらが淘汰されていく 1880 年代までの紆余曲折の時期の中学校の教育内容の実態解明は、高等中学校への接続関係を解明する上でも重要な意味を持つとの展望から、カリキュラム分析に基づく 1870 年代の中等教育理解を目指すという構造である。

作成時間の都合で具体的な資料の提示はされなかったが、第 4 章「教則作成の工夫」に関しても注目すべき三つのポイントが示された。第一点は教則作成をいったい誰が行ったかという重要な問題で、それは県令や学区取締ではなく、学務課員がその役割を担ったと理解していること。実際、東京、京都（三宅五郎三郎が作成）、長野では学務課員が作成している例を認めている。第二点は中学教則略に「国語」が表れたように、当時の公用文の普及とともに新しい国語が誕生し、それがカリキュラムにインパクトを与えたということ。第三点は、東京大学や予備門、専門学校など「進学」先が具体化してくることによって、小学校すら普及していない当時の学習環境に現れていた等級と年齢の齟齬の問題を中学校が受けとめることとなり、アーティキュレーションに苦心していたことである。

なお、第 3 号用の原稿執筆の過程で、東京・京都・大阪の三府の中学校、および中学校教員養成の問題の 2 点についてはそれぞれ別途稿を改める必要があるとの認識を深められたそうで、益々旺盛な執筆意欲と壮大な構想に参加者一同、今回もまた大いにその薫陶を授かることとなった。

小宮山会員はここで早退し、記録係を富岡会員へとバトンタッチした。

なお、珍しく現地に余裕を持って前日入りすることのできた富岡・小宮山両会員は、高円寺駅前の人気店「天すけ」にてプレ会を行いました。機会があれば是非みなさんともプレ会を、と思う次第です。

【ミニ情報】 すでにご存じの方もおられるでしょうが、本稿執筆のため京都府学務課員「三宅五郎三郎」をネット検索していた際に、京都一中初代校長今立吐酔の回顧文（大正 9 年 12 月発行の『会誌』創立 50 周年記念号が出典）が翻刻されていることを知りました。今立が上京した時の森文相、木場秘書官、北垣知事との間で繰り広げられた三高移転秘話

が語られていますので、未見の方はご参照ください。
「京都府立洛北高校 11 回卒同窓会のブログ」
<http://r11-3711kai.cocolog-nifty.com/blog/2010/02/post-3769.html>

（以上の文責：小宮山）

(以下富岡による補足)

小宮山会員が退出された後、谷本会員と田中会員から調査の報告があった。

谷本会員からは、金沢調査の成果の一端が紹介された。1883年の師範学校と農業講習所の合併問題や、1889年の経費問題などを取り上げ、石川県であっても教育予算に余裕があったわけではなく、教育の費用対効果についての議論が存在していたことなどが示された。

田中会員からは、広島県と山口県の調査についての報告(詳細は、本号の記事を参照)があり、広島県でも山口県でも共に、第三高等学校設置負担金をめぐる県会内の抵抗が比較的小さかったことなどが紹介された。また、広島県では、先行研究において県会の分析がまだ行われていないのではないかとという問題提起がなされた。

終了後、谷本・田中・富岡の3名は、高円寺駅前で軽く、ミニ懇親会を行った。以上

[研究報告]

高等学校制度と第三区内府県(3)

—広島・山口の場合—

田中 智子

岐阜・三重・和歌山・滋賀に続き、今回は高等学校制度発足前後における広島県と山口県の動向を取り上げる。

1885年11月の広島県会では、中学校費否決には至らないものの、これを廃止してよいとする議員から、次のような発言があった。「廿年度福山ニ阿部侯ノ主張セラルハ、中学ノ建築アリ。広島ニ高尚ナル学校ヲ創立スルヤノコトハ予ハ風説ニ聞ク所ナリ。」つまり、福山で旧藩主の力による中学校ができる、あるいは広島において、よりレベルの高い学校ができると聞いているので、現在の中学校は閉校してよいというのである。一方、中学校費を廃止すべからずとする議員からは、「当今…熊本ニ鹿児島ニ山口ニ皆大ニ学校ヲ設置セルニ本県ニテハ中学校スラモ廃スルト云ハ、実ニ吾廿四郡ノ学事ハ退歩ヲ極メ人民ノ不幸是ヨリ大ナルハナシ」との見解が披露された。他

県における「大ニ学校」設置の噂を取り上げ、自県の教育退潮を嘆いているのである。このように、県内外を問わず、現況の流動性のなかでの将来的な可能性を斟酌した上で(あるいは噂に惑わされながら)、目下の決定を行おうとする姿勢がみられる。

高等学校制度発足後の翌年11月の県会になると、医学校費について大激論が交わされた。「今広島ニ学校ナシト云フモ東京大坂ニ学ブノ方法アレハ今之ヲ廃スルモ生徒ハ志ヲ挫カンヤ。且ツ京坂卒業医ト広島卒業医トハ其レ学力モ遠ク彼レ優フレハ今之ヲ廃スルモ生徒ハ志ヲ決シテ京坂ニ遊学スルノ奮発心ヲ起シテ一層良医ヲ得テ決シテ医師ノ欠乏ヲ告クル憂ナシ」との意見にみられるように、広島で医学校を維持しなくても、医学志望者はよりレベルの高い教育が行われている東京や京阪に遊学するだろうとの理由による廃棄論が述べられた。一方、存置論

者は、以前小宮山道夫氏が明らかにした高等中学校設置計画との関連から、次のように維持を主張する。

「今や県庁又ハ有志者ヨリ醸金シテ将サニ設立セントスル高等中学校ハ不遠共良結果ヲ得ントスル場合ナレハ」「高等中学校ヲ設立セハ之レニ伴随スルモノヲ置カサルヲ得ス」。つまり、来るべき高等中学校設立の日をにらむならば、それに併置されるはずの医学校を維持しておいたほうがよいとの考え方である。採決の結果、医学校費は全廃可決され、県当局や常置委員は再三の再議を要請するが、議員たちの多数意見は変わらず、医学校は廃止されるにいたる。

次に山口県であるが、この県は、すでに1883年3月に医学校を廃止していた。しかし1885年3月の県会で、再び医学校費が計上された。これに対し、中学校ですら防長私立教育会を設立して何とか維持されようとしている折から無理であるとの反論も出されたが、議長より県令宛の乙種医学校設置建言案が、ほぼ満場で可決された。賛成議員の発言は次の通りである。「建言採用ヲ可トス。聞ク処ニ抛レバ県庁ノ考案ニハ数県ヲ聯合シ以テ医学校ヲ設クルノ計画モナリタレト近隣ノ府県ニハ皆既ニ此校ノ設アリテ其計画モ行ハレサル由広島県福岡県共ニ甲種医学校ノ設アルニ独我県ニ限り今日乙種医学校タモ是ナキハ甚タ遺憾トスル処ナリ」——このように、これまで見てきた諸府県と同様、府県連合学校（医学校）設立構想の存在が前提になっている。ただし、それは実現性の低い構想であるから、隣県広島・福岡のように山口県にも医学校が必要だというのである。

1885年11月の県会で上程された医学校費は、常

置委員が修正削除し、これが可決されるにいった。常置委員の説明は以下の通りであった。「医学校費ハ之ヲ全廃セリ。是レ他ニ非ラス、聞ク頃日其筋ニテ府県ニ医学区ヲ設ケラレ一県限り設置ヲ止メラルハヤノ議アリト。然レバ若シ十九年度ニ於テ新ニ建設スルモ一朝学区ノ創定ニ遭ヘバ忽チ其功ヲ空シフスルノ歎ナキ能ハス。因テ暫ク其挙ヲ停メテ政府ノ発令ヲ待チ果シテ学区ノ設ケナキトキハ廿年度ニ於テ直チニ建立ニ着手スルモ未タ遅シトセス」。今度は、複数府県での医学区構想が実現して一県ごとの設置は禁止されそうであるから、とりあえず今年には設置費用支弁を見合わせておこうという判断がなされた。このように、明治18・19年度の山口県会では、府県連合学校構想を横目にみながら医学校再置の可否をめぐる議論が展開されていた。

広島での単立の高等中学校設置計画（実現せず）、あるいは山口での諸学校通則適用による高等中学校設置計画（実現）の存在を考えると、第三区に属する県として第三高等中学校の設置に伴う分担金が課されることに対して反論がありそうに思える。ところが、以後の県会においては、両県とも、この件に関して紛糾した様子がみられない（代わりに大問題となっているのは農学校設置の件である）。この点、強い抵抗がみられ、高等中学校の完全な国庫支弁あるいは府県委員会への予算決定権付与を訴える建議まで作成した京都府や滋賀県や兵庫県とは異なる。なぜ広島・山口県会では問題にならず、素直に納得してしまったのだろうか。今後考えなくてはならない課題である。

[近況報告]

近畿大学での大学アーカイブズ立ち上げを目指して

富岡 勝

勤務先で大学アーカイブズ立ち上げのために、いずれは何かやらなければならない、と考えていたが、ある教員から「自校教育のためにも大学アーカイブズが必要だから退職前の数年間で、実現にむけてがんばってみたい」という声がかかったので、8名の学内グループをつくって学内研究助成金を獲得し、「近畿大学の大学アーカイブズ構築に関する基礎的研究」というプロジェクトを始めることとなった。

プロジェクトの内容は、各大学アーカイブズへの訪問調査(8月～9月、全12校)と公開研究会の開催(12月)を中心としたごくシンプルなものである。ともかく、訪問調査を通じてメンバーの教員同士で「大学アーカイブズが近畿大学に要るのかどうか」について本音で話し合い、その結果を学内に伝えてみよう、というプランである。

1880年代研の活動、個人で交付されている科研費の活動などを実行しながらこのプロジェクトを進めていくので、確かに忙しいが、工夫しながら何とかやっていきたい。

ご参考までに、学内研究助成申請書の一部を紹介したい。

①研究の背景

本学では近年、初年次における自校教育に力が入れているが、この自校教育を含めた教育活動を継続的に充実させていくうえで、本学の教育・研究の営みに関する多様な資料を絶え

ず収集・整理・保存し、それらを積極的に公開していく取り組みが重要になってくるだろう。大学が自らの歩みを絶えず振り返るためには、具体的な歴史的資料が必要だからである。また、今から15年後の2025年に創立百周年を控えていることから、大学の各時期の歩みを示す資料を整備する必要性が高まっているといえるだろう。

近年各地の大学で、大学アーカイブズ(大学文書館)を設置して保存期限の過ぎた大学法人文書や大学の歴史に関わる学内外の資料を積極的に収集し、それらを整理・保存・公開する動きが盛んになりつつある。2001年に設置された京都大学の大学文書館がその先駆けとなったが、情報公開制度の対象とはなっていない私立大学でも、大学の法人文書を保存・整理・公開する取り組みが、いくつかの大学で進められている。本学においても、こうした大学アーカイブズを構築することは有意義なことではないだろうか。

しかし大学アーカイブズといっても、組織や機能は大学により様々であり、とりわけ本学のような大規模な私立大学に適した大学アーカイブズをどのように構築していったらいいのか、自校史教育を含む教育・研究にどのようにスムーズに活用されていくようにしていけばよいか、慎重な検討が必要である。

また近年、図書館・文書館・博物館の連携に注目が集まる中、新たに大学アーカイヴズを設けようとする際に、どのようにしたら他の学内施設との連携を構想しながら設置計画を立てることができるのか、といった問題も、検討の価値があると考えられる。

②研究目的（何をどこまで明らかにするか）

本研究は、1年間の研究期間で①先行研究の検討、②各大学への事例調査、③公開研究会の開催を通じて、本学の特色に応じた大学アーカイヴズ像のあり方について一定の方向性を示すことを目的とする。つまり、本学で大学アーカイヴズ設置構想が求められた際に、基礎的な知見を提供できるような準備を目指す。

③研究の特色・独創性及び結果と意義

本研究を通して、自校教育を含む本学の教育活動の充実に必要な、本学の歴史に関する資料整備を進展させることができる。

また、様々なタイプの大学アーカイヴズが各地の大学に存在している中で、新たに大学アーカイヴズを設置しようとする大学に対して、目指すべき大学アーカイヴズ像の選択に寄与するような先行研究は十分とはいえない。本研究の取り組みは、本学の教育の充実だけでなく、新たに大学アーカイヴズを構築しようとする全国の大学に対しても有用な知見を提供するケーススタディとなる。

「図書館・文書館・博物館の連携」を最初から目指した大学アーカイヴズについても、その意義や実現方法について十分議論されていない状況である。したがって本研究によって、「図書館・文書館・博物館の連携をはかるような大学アーカイヴズをどのようにしたら設置できるのか」といった点についての有用な知見を提供することも可能である。

以上

[お知らせ]

・2011年度科学研究費について

7月になって、科研費の交付について、やや不透明な状況になってきました。今年度は、最初に7割、あとで3割がというような分割交付方式になります。そして、財政的な理由からあとで支給される3割は、大幅減額の可能性があるようです。

大変深刻なことですが、研究費をこれまで同様、有効に活用していきたいと思います。

・教育史学会大会（at 京都大学）でのコロキウム開催について

6月5日の大会記録にもあるように、2011年10月1日～2日に京都大学で開催される教育史学会大会で、研究会として2回目のコロキウムを開催することになりました。コロキウムの日時は、10月2日の15時10分～17時30分です。指定討論者の小針氏・吉川氏からも快諾をいただき、刺激的なコロキウムになりそうです。様々な方との対話の機会になると思いますので、ぜひともよろしく願います。

また、研究年報第3号も予定どおり刊行できるよう、ご協力をお願いします。以下は、大会プログラム用に作成した企画書です。

コロキウム

「近代日本におけるエリート教育の編成

—明治期と大正期との対話—

オルガナイザー 富岡 勝 (近畿大学)
司会者 荒井 明夫 (大東文化大学)
報告者 小宮山道夫 (広島大学)
指定討論者 吉川 卓治 (名古屋大学)
小針 誠 (同志社女子大学)

設定趣旨

「一八八〇年代教育史研究会」では、2005年の教育史学会第49回大会(東北大学)において「一八八〇年代日本教育史の再検討にむけて——高等学校は何故、どのようにできたのか」と題したコロキウムを開催し、一八八〇年代の教育史を改めて検討する必要性を、高等学校成立事情の考察を中心に提起した。今回はこれを発展

させ、「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編」に関する本研究会の近年の取り組みを報告するとともに、大正期に関する研究者との対話を試みる。

『公立大学の誕生—近代日本の大学と地域—』(名古屋大学出版、2010年)を通じて大正期の地域と高等教育との関係を論じた吉川卓治氏と、『“お受験”の社会史—都市新中間層と私立小学校』(世織書房、2009年)で大正期の私立学校進学ブームを分析した小針誠氏を指定討論者として迎え、地域と高等教育との関係や、帝国大学を頂点とした学校体系の確立などの論点を中心に、一八八〇年代のエリート教育の編成について率直な意見交換を行いたい。参加者からの活発な発言を期待する。

・ニューズレター35号の締切日のご案内

年間4号発行するというペースですので、次の締切りは2011年9月30日(木曜日)となります。奮ってご投稿をお願いします。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第34号 2011年7月15日発行

<研究会連絡先> 「1880年代教育史研究会」事務局 富岡 勝
〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室気付
<E-mail> tomiokamasa@kindai.ac.jp
<HP> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/>

<原稿送付先> 鄭 賢珠
〒606-8172 京都市左京区一乗寺河原田町37-1-413
<E-mail> hyunjung4@hotmail.com

